

を明記する。適切な疼痛管理や多職種カンファレンスの開催、さらに、精神心理的問題への配慮を行うことがあげられます。

そして、緩和ケアのリハビリテーションにおいては、チーム連携が重要です。連携には、主治医の理解・協力を得ることが鍵になり、主治医、リハビリテーション医、PT・OT・ST、看護師が気軽に物事を言い合える環境が望ましいと考えます。

これらについて、本シンポジウムでは述べていく予定です。

19. がんの終末期におけるリハビリテーションの実践

大内 悦子, 大井寿美江

(国立病院機構西群馬病院 緩和ケア病棟)

【はじめに】平成19年に策定されたがん対策推進基本計画で、がん患者に対するリハビリテーションが推進された。終末期のがん患者に対してのリハビリテーションは、できる限り良好なQOLの実現を目標としている。当院の緩和ケア病棟でも緩和的リハビリテーションの重要性を感じ、PTと共に積極的に取り組み5年が経過した。がん終末期におけるリハビリテーションの効果について報告する。【事例1】60歳代女性。卵巣がん手術後、多発骨転移。[入院時の状況] 少しの体動で疼痛増強し、臥床状態。[希望] 痛みを取って欲しい。[介入] 医療用麻薬、放射線療法、ポジショニング、リラクゼーション、マッサージによる痛みのコントロール。疼痛軽減後、歩行を目標に理学療法士の介入。[結果] 歩行器での歩行確立。排泄・洗面などの日常生活動作の自立。趣味の時間を持つ。【事例2】70歳代女性。悪性線維性組織球腫手術後、脊椎浸潤。[入院時の状況] 脊髄横断症状による下肢のしびれあり、車椅子生活。「皆に迷惑をかけて悪い。なかなか死ねない。」と話す。[介入] トイレ排泄を続ける為の筋力維持訓練。車椅子移乗方法の検討。[結果] 「リハビリは気分転換になるしいいね。マッサージは気持ちいい。」と話し、積極的に散歩や外泊を希望した。【考察】2事例とも身体症状のコントロールと共に、「気持ちいい」「楽になった」「趣味ができる」と感じられ、リハビリテーションの実践が患者のQOLの向上に繋がった。終末期の患者であっても個々のニーズに合うリハビリテーションが実施でき、精神・心理的な苦痛緩和につながる。看護師が患者の身体機能に意識を向けることで、患者の残存能力を生かせる可能性が示唆された。さらに患者・家族の希望をささえ、前向きに生きる事を支えるためにもリハビリテーションは有用である。

20. 最期に家族へ出来たこと

後藤 麻里 (日高病院 作業療法士)

【はじめに】終末期のOTは、患者に満足感のある生活を保障することが重要、と言われている。今回「家族への想いを形にしたい」と希望した末期癌患者に対し、症例が重要と考える作業の満足度に着目して介入した結果、COPMの満足度の改善を認めたので報告する。なお、症例と家族には発表及び抄録作成の同意を得ている。【症例】30代女性。子宮原発の脂肪肉腫による多発骨転移。夫・息子(4歳)と3人暮らしで専業主婦。家族の希望で、本人へ明確な余命告知はせず。平成21年4月発症。平成24年8月転移による両下腿麻痺の加療、免疫細胞療法目的で入院。リハ開始。【介入と経過】〈初期〉COPM:「息子と時間を過ごすこと」重要度10。遂行度・満足度1。初期は身体機能改善の希望が強く、筋力維持と車椅子移乗法を調整。家族来院時は車椅子で花火を見ることができ、嬉しそうに話してくれた。〈中期〉失語症状が出現し、脳転移を認める。現状を悟っていた症例と、家族への想いを形にする方法を検討し、母親としておにぎりを振る舞うことを計画。滑り止めとラップを使い作成でき、満足気に振る舞った。COPM:「息子と時間を過ごすこと」遂行度10・満足度5。〈後期〉家族へ手紙を作成。環境調整することでパソコンのタイプが可能となった。息子も返事を書くようになり、嬉しそうに手紙を作成した。COPM:「息子と時間を過ごすこと」遂行度10・満足度8。その後、家族の希望より、実家山形の病院へ転院。2週間後、永眠される。【考察】緩和ケアとは、死を迎える症例が積極的に生きる支援も含まれる。その中でOTは患者や家族の満足度と要望に着目し、その要望実現に向けアセスメントと支援を行う必要がある。今回COPMを通して症例が重要と考える作業を確認でき、症状が進行する中でも満足度を確認しながら進めることが出来た。人生最期の作業を行う環境調整や機会提供が、終末期のOTに求められていると感じた。

21. 緩和ケアにおける口腔ケアの役割

角田 宗弘, 渡部 隆夫, 柚木 泰広

金子 美紀, 矢島 雅美, 土田 紘美

金子沙奈恵, 小野原静香, 西 彩乃

牧口 由似, 天笠 光雄

(日高病院 歯科口腔外科)

近年、医療現場において口腔ケアという言葉が定着しつつあり、口腔内を衛生的に保つことが口腔の疾病予防だけでなく、全身の健康保持・増進、そしてQOLの向上に役立つということが知られるようになってきた。歯科においては、人生のライフステージに合わせた歯科医療を提供する、シームレス・ケア(継ぎ目の無いケア)の重